

国際 I C T 利用研究学会 論文誌

Journal of International ICT Application Research Society

JIIARS

2024年 第6卷 第1号

January 2024 Vol.6 No.1

1

目次

巻頭言

ICT 利用と異文化理解

国際 ICT 利用研究会 副会長 次郎丸 沢 1

論文

教育現場におけるハラスメントに対する制度的対応に関する学術的整理
～学校教育現場における，教室授業，オンライン授業，医療教育に着目して～

佐久間 貴士（千葉県立保健医療大学健康科学部）
菅原 良（明星大学 明星教育センター）
奥原 俊（三重大学 大学院工学研究科情報工学専攻／
データサイエンス教育センター）
神崎 秀嗣（秀明大学 看護学部） 3

北海道で働く外国人社会人のキャリア開発に関する一考察
－中国語圏からの元留学生社会人のダイアログを手掛かりとして－

菅原 良（明星大学 明星教育センター）
渡部 淳（北海道文教大学 国際学部） 10

雙陸ルールにおける常局格制の重要性

木子 香（大阪電気通信大学 総合情報学部） 19

非接触無侵襲摂食嚥下機能評価装置 (NESSiE) 自動解析プログラムで計測した
男性における嚥下時喉頭挙上距離の妥当性の検討
～従来法の嚥下造影検査 (VF) による手動計測との比較～

柏村 浩一（国立研究開発法人 国立国際医療研究センター リハビリテーション科）
高田 美樹（法政大学 デザイン工学部）
藤谷 順子（国立研究開発法人 国立国際医療研究センター リハビリテーション科）
. 27

編集後記

青木 和昭（国際 ICT 利用研究会 評議員） 39

ICT 利用と異文化理解

国際 ICT 利用研究会
副会長 次郎丸 沢

2023年5月8日から新型コロナウイルス感染症が5類感染症に位置づけられたことにより、新型コロナウイルス感染症は「パンデミック」と言える状況ではなくなった。このパンデミックの対応について各国は異なる対応を見せたが、これは各国の持つ文化が大きく影響していると考えられる。例えば、個人主義の度合いが強い文化圏と集団主義の度合いが強い文化圏で国民に課す行動制限の期間と強さが異なることが露見した。文化とは人間によって獲得されたあらゆる能力や慣習の複合総体のことであり、ICT利用も人間によって獲得された能力の一つであることから、ICT利用と文化とは切っても切り離せない関係であると思われる。



本学会が主催した国際会議である The 1st International Conference on ICT Application Research (IAR 2023) では、異文化理解を目的とした Social Event を複数開催し、参加者の異文化理解に貢献した。これは、国際会議という場が異文化理解を行うのに適した場であると同時に、本学会に関わる皆さんにとって異文化理解が重要であるという判断によるところである。IAR2023 の Excursion (国際会議で行われる小旅行) 参加者からも、最近の国際会議で Excursion が減ったという意見を頂いた。国際会議運営の立場から考えると、 Excursion は直ちに参加者に対してプラスの影響を与えない Excursion の目的が参加者同士の懇親が目的であればもっとコストパフォーマンスの高い方法がある、という理由で廃止しているように思われるが、IAR で Social Event を開催している理由はそこにある。

本学会の性質上、本誌には読者の研究範囲ではない論文も掲載されていると思われるが、私は「異文化理解のため」という視点で各論文を拝読している。本論文誌が皆様の異文化理解の一助となり、そこから新たな研究が発生することを祈るばかりである。

略 歴

1977年 福岡県生まれ。

久留米大学講師（兼任），株式会社 OME 代表取締役，

株式会社カンファレンスサービス代表取締役。

博士（学術，山形大学）。

専門は国際会議に関する諸領域，教育工学など。

編集後記

学会活動も7年目を終え、8年目を迎えております。学会員をはじめとする皆様方のご協力に深く御礼申し上げます。

今年度は、本学会で初開催となる国際会議である The 1st International Conference on ICT Application Research (IAR 2023), および第8回 国際ICT利用研究学会 全国大会 (IIARS2023) が開催され、いずれも多くのご発表とご参加を頂き盛況のうちに終了しております。ご発表、ご参加いただいた方には厚く感謝申し上げます。全国大会につきましては、2019年度に大阪電気通信大学で開催された全国大会を最後にオンライン形式での開催が続いておりましたが、愛知医療学院短期大学での現地開催となりました。オンライン形式での学会開催は遠方でも参加しやすいというメリットはありますが、現地開催で発表・聴講し、他の発表者や参加者と対面で交流することは、研究活動を進める上で重要であるということを改めて感じました。国際会議につきましては、来年度も IAR2024 として青森県の Wa Rasse で開催を予定しております。IAR2023 に引き続き、多くの方のご発表、ご参加をお待ちしております。

また、2023年はICT環境にも多くの変化があり、特に ChatGPT などの Generative AI (生成AI) の登場は、ICT環境に大きな衝撃を与えました。2023年度の開始当初、多くの大学や企業が生成AIへの対応に追われたことは、記憶に新しいかと思えます。ChatGPT や画像生成など多くのサービスはすでに我々の生活に浸透しつつあり、これらの技術とどのように向き合っていくか、本学会としても議論を続けていく必要があると感じております。全国大会などでも生成AIに関する多くの発表があり、今後も研究会や論文誌で議論を続けていければと思いますので、皆様方のご協力をよろしくお願いいたします。

国際ICT利用研究学会 評議員

立正大学 地球環境科学部 青木和昭

国際ICT利用研究学会論文誌 第6巻 第1号

Journal of International ICT Application Research Society Vol.6 No.1

2024年1月31日 発行

発行者 国際ICT利用研究学会論文誌編集委員長 山下倫範

表紙デザイン 内藤慶恵

印刷 株式会社カンファレンスサービス

問合せ先 office@iiiar.org